



新公集

卷四

昭和十三年四月十六日印刷
昭和十三年四月二十日發行

新萬葉集 第四卷

編纂代表者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)一〇一一
一四二番

目次

——作者別氏名五十音順——

さ	の	部		三
し	の	部		一六二
す	の	部		三二七
せ	の	部		四〇六
そ	の	部		四二五
作者略歴				四三五

○装幀 横山 大観
○題簽 比田井 天來

第 四 卷

佐 川 力

張り更へし障子ひびかせて行くバスよ晩秋のひるの部屋は閑けさ
此の日頃吾子にかまけてなすことなしうばらも散りてひまはりの庭
吾子はいねて午後の二階のすずしさよ潮風があふる枕蚊帳の裾

佐久間 安生

十二年振りにて生みの母に逢ふ

相逢ひてかき口説く母や眼に光る涙ぬぐふと荒れし御手を見す

佐 久 良 子

山路下りてしたしくもあるか梓川瀬の音ひびかふ笹原に入る
酸素のみ吸ひて五日を覺めまさぬあはれあはれ吾が父の眠りよ
能登山に寂けき光入りはてて天のうす雲夕焼けにけり

夕まけて歸れる吾子^{おこ}がまづ吾にまちませるかと言ふは愛^{かな}しも

佐倉八洲子

われ獨りあやめもわかぬ部屋にあり窓外を行く人聲聞きぬ

佐後淳一郎

春の雨ひと夜の降りに門川のゆたけき水はひびきあげつつ

瀧水のしぶきにゆるる楓^{かへるて}の枝になく蟬は濡れて鳴きをり

堅田の出洲は夕日に照りながらなほ雪しげし濁り波のうへ

松山のなだれ落ちあふ萱原にゆふべ鶯の聲の大きさ

春はなほゆふぐれおそき門に出て水のながれを見てをりにけり

昭和三年四月十日近江野洲三上山麓神守田に悠紀齋田修祓式を
行はせらる

われはもや悠紀の御田のみ被ひのあやにかしこきみまつりにあふ

昭和七年十月十四日多賀大社正遷宮を拜し奉りて

阿那邇夜志神の愛袁登古愛袁登賣の月夜齋庭に天降り給ひつ
しとしとと天の露霜降るからに寒夜を濡れて人ら額伏す
天つ神導きまをす白絹の眞夜のみ庭に長々と敷く

比叡山にて

松の芽のみどりあかるし晝ふけてこの大き谷に春の雨ふる
かすかなる春雨あさより降りそめて根本堂の雪を消ちつつ
大堂の眞闇にとりゆらぎたる不斷の燈は昔より今に
春さきの雨なほさむき山のうへ黒衣ふくれて僧はこもれり

防空演習一首

うすづく日の逆光に立ち橋の上にひとかたまりの兵が話せる

老猫らうねこのうづくまりゐる狭き門雲かがやけば朝顔もしぼむ

ひまはりの莖をめぐりてしづむ日にすすび果てたる槍をみがかむ
昆蟲のまなこにうつる夕焼を立秋すぎておもひみにけり

苔のうへにつゆじもたもつ朝のまは鳥の囀りのきびきびしさよ
ふくだみて鶉は砂にうづくまる昨日も今日も霜おきにけり
み冬づく山を越え來て百鳥の網にかかるはあはれにおもふ

佐 今 晩 葉

梅雨はれてみどりあかるき庭さきの梨の木肌を蟻のぼるみゆ
ふるさとの稻の不作の思はれて見る目に寒しこのごろの雨

佐 々 黙 々

父病みて九十餘日、神に占問へば五寅の宮のみ砂を夜の丑刻に床
下家の周りに撒き被ふべしと一首

蹠あなうらにさやる小草をいとほしみ今夜こよひは踏みて神砂を撒く

伊吹嵐吹く日となりぬこの里は大根だいこん切干つくりいそぐなり

朝にけに笑あまひ寄り来る嬰兒みどりこをあはれと思へば生きたくありけり

明けやらぬ夜靄の下にほのかなる明るみもちて咲きゐる菜の花

時鳥ときとぎす啼きぬといふに聴き居れば山の木深みに鳴きにけるかも

末弟京大講師就任

ひとすぢに父のころをたもち來しこのうれしさを母に言ひたり

島木赤彦師を偲ぶ一首

ほそりたるわがししむらをあはれがりなでたまひにし人は死にせり
山に來てたぬしかるらしおくれ來る吾兒あゐこはもろ手につつじ持ちたり
わが子らのむつぶを見つつ嘆くなり父母のへにかく育ちにし

赤彦追悼號を讀みて

おほき人はかく苦しさにあり堪へて至りましけむわが心いたし

霜害調査 二首

地圖もちて霜害地番調べをり地に落ちたる桑のわか芽は

霜害のはたけ見まはる古靴のかたきをはきて我が足痛し

夜なよなのうまいを欲りて茶をたちし父の齡にやうやく近づく

幾年かこころいぶせく眺め來し穀物庫の壁ぬりかへぬ

參り來ぬ幾たり人を思ふなり五たびの忌を山にいとなむ(赤彦忌)

わが子ろの潮干土産のしじみ汁うまらに食して砂かみにけり

降る雨の雲のうすれて照る日ざし丹つつじの花苔におちゐる

こまやかに庭のわか葉にふる雨の二日ふりつぎ映る苔のいろ

こまやかにふる雨見ればゆく雲のこきうすきありてかげるわが部屋

佐佐木 信綱

明治二十八年作 「愚草」より五首

天つ日の光かしこみいやさきにまつろひよりし高さご島山

竹柏會大會の日 明治三十一年四月

ねがはくはわれ春風に身をなして憂ある人の門を訪はばや

折にふれて 同年七月

天地のかくろへごとをわが胸にささやくごとき水の音かな

毛越寺 同年九月

大門のいしず急苔にうづもれて七堂伽藍ただ秋の風

富士登山作 明治三十五年八月

いつよりか天あめの浮橋中絶えて人と神との遠ざかりけむ

長沙に葉德輝郷紳を訪ふ 明治三十六年十二月「遊清吟藻」より三首

苑その舊りて臘梅の枝花えだまばらに書齋の書よみのうづだかく淨し

開福寺梅曉師來訪

東亞は支那の前途はと燭の火をまもりつつ語るわが日本僧

金陵作

建業の冬の城壁じやうへきくろずめる寒きかげゆくわが驢馬の鈴

大和懷古「新月」より二首

女の童柄香爐ささげまうのぼる長谷はせの御寺の山さくら花

大和の秋

ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔の上なる一ひらの雲

華盛頓會議にいでたつ同人に「常盤木」より一首

敷島のやまとの國をつくり成す一人とわれを愛惜まざらめや

狩勝峠「豊旗雲」より十首

さほろ嶺の大きな岩根にわがをれば傍に近く雲遊ぶなり

山の上にたてりて久し吾もまた一本いっぽんの木の心地するかも

秋夜

からうじてわがものとなりし古き書ふみの表紙つくろふ秋の夜のひえ

大震災 録一首

空をやく炎のうづの上にしてしづかなる月の悲しかりけり

折にふれて

道の上に残らむ跡はありもあらずもわれ度みてわが道ゆかむ

明治天皇御集編纂のことをへける日

大御歌えらびまつらくをぢなきや身もたな知らに仕へまつりき

天元四年書寫の琴歌譜を見出でし日に

吾はもや此の歌卷を初に見つ千とせに近く人知らざりし

世界戦争の頃

國の命かけて戦ふ幾とせの雄々しくかなしく尊くありけり

時事偶感

言舉しさやぎふるまふ今にして靜かに吾ら思ふべきなり

大禮特別觀艦式の日

天皇旗蒼海の日にまかがよひ冠しろき富士にむかへり

國壽の歌「萬」より五首

神の國あきつ島やまとあけぼのの光の中にさくら花咲く

時事偶感

青空の下あへぎいきづくいかにか此の無数の人を飢ゑしめざらむ

湯の山にて

白雲は空にうかべり谷川の石みな石のおのづからなる

皇太神宮式年祭に奉仕して

神風の伊勢の御民と生享けてかしこし今宵御火たきまつる

阿蘇ぶり

颯々と大阿蘇の風ふき來なり粟生がうへを飛ぶ赤とんぼ

大津 「椎の木」より十七首

大津牛はつ春なれば角まきの眞赤き布に映ゆる湖の日